

# 社会学の研究对象としての「戦争」

—その多様なアプローチ—

野 上 元

## 1. はじめに——社会学という自由な学問

ただいまご紹介にあずかりました筑波大学の野上です。よろしくお願いたします。今日は、学者として自分がやってきたことを少し話しながら、戦争が社会学の研究对象になりうるのか、どういう意味で対象となるのか、あるいはその際、何をしなければいけないのか、できるのか、ということについて、お話していきたいと思います。

最初に僭越ながら私の学問観をお話させていただきたいのですが、何よりも、社会学という学問は非常に自由な学問だということです。学問というものはいろいろ決まりごとがあるのですね。やり方が決まっている。学問するっていうのは、特定のやり方があってこれをやらないと認められないというルールがたくさんあるものです。

それは科学であるということなのですが、社会学はやはりそうした学問の一つでありながら、非常に自由だということがあります。学問の分類でいえば、文学に近いことをやったり、歴史学に近いこと、政治学に近いこと、思想史や哲学に近いことをやったりすることがある。これはこの学問の武器でもあるし、弱点でもあるのですね。自由なので、いろいろなことをやり始めるのですが、あまりに自由だから統制が取れなくなることがあります。ですので、その自由を自分で存分に使いながら、自分のやっていることをどう説得的に提示するかということがあるわけです。そのコントロールはかなり自己責任に近い。誰かに何かこれをやりなさい、こういうルールでやりなさい、といわれるよりは、各人それぞれの関心と向き合いながら、むしろ自らそのルール、規準を作っていくわけです。その科学的証明の「確度」(確からしさ)ですら自分の責任でコントロールする必要がある。「適当でいい」ということではないですよ。むしろその逆かも知れません。普通の学問であれば、一つの研究の成果の公表

においてどの程度の確度が必要かということがあらかじめきちっと決まっているのですけれど、社会学をやりたい場合、「誰に」「何を」「どう」伝えたいのかということの関わりで確度をコントロールしなければならないということです。

その背景には、社会学と「実社会」（社会運動や社会政策、それを支える言論）の「近さ」がある。つまり、普通、学問はある程度の確からしさを確保してから公表されるべきものではあるけれども、逆に、あまり確からしくないかもしれないけれども、現在の状況からいって今いわなければいけない、ということがある場合もある（その逆もある）。この幅のなかで、自分の研究はどの辺りで発表していくべきか、ということ自分で決めなければならない。それすらも自分で決められるという意味では非常に自由なのだけれど、その分全て責任がかかってくるというところがあり、それは社会学の面白さだと思っています。それを皆さんにも楽しんでほしいと思います。

## 2. 「戦争社会学」を構想すること

今ご紹介いただいたように、私は数年前から自分の専門の一つを「戦争社会学」と名乗っています。社会現象とされるものに社会学とつければ、家族社会学とか都市社会学とか福祉社会学とか地域社会学とか、何でも社会学になるところがあって、私は「戦争」をつけたのですよ。「戦争社会学」。社会学という学問の自由さに乗っかるかたちで戦争の社会学的研究を始めてしまいました。自分は楽しいです。まずそれは大事なことで、皆さんが例えば社会学を学びながら、最後に卒論を書いたりするときには、やはり考えていて楽しいと思えるテーマを選んで欲しい。楽しいということだけが自分を支えてくれるという感じですね。

それと、少し社会がきな臭くなってきていますね。国際関係でも緊張が少し高まっているし、それに合わせて国内の意識や体制が変わってきている。戦争というものを過去のものだと考えていた社会から、ひょっとすると今後することもありうるぐらいの社会にはなってきていますよね。することを全く想定しないでいてもよかった時代から、少なくともする可能性をどこかで想定しなければ、この平和も維持できないという状況にまでなりました。つまり、この国の軍隊がどこかで人を殺す、あるいは殺される可能性です。別の言い方をすれば、過去のこととしてではなく、同時代

人として、何らかのかたちで戦争やそれをめぐる決定に関与する可能性がある、ということです。この感覚というのはやはり2000年代半ばになってからだと思います。

冷戦が終ったことによってタガが外れ、いろいろな意味で予測不能な緊張が高まっていく時代に、戦争ということをもう少し社会の問題として考えなくてはいけないと考えるのですね。状況はどんどん進み、何か衝撃的な現実が起こるかも知れない。それを社会学者としてキャッチアップしていなければならないという使命感もあります。いや、すでに起こったできごと「追いつく」のではなく、少し未来を見越して「今いなければならぬこと」を考える社会学の挑戦です。

2006年に『戦争体験の社会学』という本を書きました。これは2002年に大学院に出した博士論文が原型になっています。そのときは『戦争と書くこと』というタイトルでした。「戦争」という巨大な現象と人々の体験。その間に「書く」という行為があり、体験者たちが戦争体験記を書く。つまり、戦争体験記が書かれるという社会的な経験の広がりやその歴史的な文脈に着目した博論だったのですけれど、タイトルがわかりにくいということから、『戦争体験の社会学』という本になりました。

社会学者として戦争体験に興味を持ち始めたのは、1994年に大学院に進学した頃でしょうか。学部ときは日本政治史を専攻していたのですが、大学院に進んで日本史のアイデアを社会学という学問のなかで展開してみたい、つまり歴史社会学に挑戦してみたいという気持ちがあって、社会学を学べる専攻に移ったのです。その90年代半ばは「戦後50年」。1945年に日本が敗戦して、それから50年経ったというわけです。すでに「戦争体験の風化」という言葉すらも風化していましたが、それでもまだ戦争体験者がだいぶ生きていたのですね。今、戦争体験の聞き取りをしても90代でご健康な方を探さなければならなかったり、あるいは当時まだ子どもだった方に対する聞き取りだったりしますよね。ですがその頃（90年代）は、戦争に25歳ぐらいで行った人や、一度動員解除されて故郷に復員してきた後、再び戦争末期に軍隊に入って戦争に行く、という二度の戦争体験をしている人もいました。まだ戦争体験の聞き取り調査が比較的容易にできる時代でした。

一方、1995年頃にあった動きとは、「戦争体験」ではなくて「戦争の記憶」という言い方がされるようになったことです。実体験者がどんどん失

われていくのですね。それが語られたり、書き残されたりして、記録として残っている。そういう時代を「記憶」という言葉で表すとすると、戦後50年=1995年というのは、体験者がまだ生きている一方で、それが「戦争の記憶」として語られ始めた時代です。私自身は、「戦争体験」という言葉に愛着があるし、まだ生きている人がいるのだから聞いて回ろうという気があった。一方で「戦争の記憶」という言葉が出てきて、過去の戦争をめぐる社会意識の新しいありようが出てきたのだと感じました。この博論や著書では、体験者が体験を書き残して記録になり、記録が人々に共有されて集合的記憶として受け継がれていくというプロセス全体について、書きました。

それまで戦争の研究には、ある一定のフォーマットがあるようにみえました。戦争に反対しているという態度表明です。戦争は絶対に繰り返してはいけないというかたちでしか、研究をしてはいけない。私もそうは思っていますけれども、もう少し過去のものとして価値相対的に考えられるのではないかとも思っていました。いってみればすごく「面白い」社会学の分析対象として考えることができるのではないかという態度で書いたのです。文学と社会学の両方に興味がある人、戦争体験文学あるいは戦争文学に興味がある人は是非読んでみてください。

この博論や著書の執筆、私としてはすごく楽しかったのですが、その限界がどうしても気になってしまった。つまり、そもそも「戦争体験」って何だということです。一応この本でも昭和の戦争だけでなく明治時代まで遡って書いたけれど、戦争という現象自体を社会学であまり追えていないという思いがあって、あるいは他の社会や国、他の時代と比較してその特徴を理解する必要があるのではないかという思いがありました。だから単著が出たあと数年間は、博士論文の「補論」を引き続き書いていたという感じです。

そんな中で、2000年代のきな臭い雰囲気というものを反映してだと思のですが、戦争社会学研究会の設立準備会というものが2009年にありまして、それに呼ばれて私も賛同者に入ったわけです。ご自身が戦争体験者であり、のちに私が仲間と編んだ『戦争社会学の構想』という本に論文を寄せてくれている森岡清美という家族社会学の大先生が、問題提起的な講演をしてくれました。森岡さんは、戦争の時代に巻き込まれて、自分の青春時代をそれにすごくエネルギーを使った、友達が死んでしまったという

感覚がある人です。戦争という人生を決定するような大きな意味を持つ体験を、自分がやってきた社会学という学問においてテーマ化、領域化できていないということがすごく残念だ、と。かなり高齢の先生ですが、まだ一つやり残したことがあるとすれば、戦争を社会学の対象にしていくことだとおっしゃっていました。

この思いをみんなで共有していこうということになり、研究会の活動として年次大会をやっていこうということになりました。またそれと別個に、40人ぐらいの著者を集めて『戦争社会学ブックガイド』という本を出すことにしました。これは、戦争社会学の探究可能な諸テーマをブックガイドという形式で示した本です。卒論や修士論文を書く学部生や大学院生ぐらいまでが対象ですが、そうした論文において、割と戦争体験や「戦争の記憶」「戦争の表象」がテーマになっていることは知っていました。ですので、その人たちに基本図書を示したいということがまずありました。

これは、良い意味で批判をたくさん受けました。この本が入っていない、あのテーマがない、「戦争社会学」意味不明、と。ただ批判はむしろ、こっちが勉強させて貰うありがたい機会なわけです。普通は基礎的な理論があって、さらに実証的な研究が積み重なって、それらが「戦争社会学」と名乗ってもよいというぐらい厚みになってからブックガイドというのはできますよね。だけど、分野がまだ明確になっていないのに先にブックガイドを出してしまいました。批判は当然でしょう。

批判を受けて感じたのは、むしろ戦争社会学はいろいろできるな、たくさんテーマがある、みんなでやってゆけばいい、ということです。このブックガイド自体、こんな本があるなら更にこんな研究が可能でしょう、この本とこの本を繋げるとこんな研究領域が見えてきますよ、というアイデア集ですね。この本は、ひとつの分野を一人の人が3冊ぐらいずつで紹介しているのですが、その文字数が少ないのですよ。字数が足りない、もっと書かせてくれ！というクレームが執筆者からたくさんあがったくらい。逆にいえば、非常に密度が濃くなった。つまり、アイデア、研究テーマがたくさんあるのです。ただ確立した分野として名乗ることはまだできていない。そういう状況です。もう一つ弱点をいいますと、基本論文の紹介ではなく「ブック」ガイドだという点です。まだ単行本になっていない（論文段階の）ものも示せばその可能性はもっと広い。

本というものはやはり論文に比べると数年とか5年ぐらい出るのが遅れ

ます。まだまだ萌芽的な問題意識、テーマを開拓中のもの、あるいは手堅く学術性の高いものは、いろいろなところに論文として散らばっているのだけれど、本という明確な形で与えられていない。例えば、日本で戦争社会学を構想するとき、自衛隊は重要な研究対象だと思います。日本で軍隊といえば自衛隊しかありませんが、自衛隊についての本格的な社会学的な研究は、まだまだありません。一つ一つの論文も入れて良ければ、自衛隊が社会学の対象の研究もあるわけですけど。既存の単行本に頼るしかないので、ブックガイドとしてまだ抜けているテーマや領域があります。

その次の年に、戦争社会学研究会の大会で企画されたシンポジウムやワークショップが原型となって出されたのが『戦争社会学の構想』です。この本もなかなか豪華な執筆者がそろっています。まだまだ足りない領域があるとも思いますけれど、これだけ幅広いテーマが「構想」として並び、可能性を示すことができました。

### 3. 社会学的対象としての「戦争」①：

#### 「戦争体験の社会学」から『戦争の記憶』論へ

社会学にとって、戦争は可能性を秘めた重要なテーマだったのです。ただもちろん、若いときに戦争を体験した、今では大御所と呼ばれるような先生方にとっては、戦争というものをどう考えるかっていうことは、それぞれの人の社会学をすることの中心にあってもおかしくないような重要な課題だったので、戦争社会学的な探究をしています。ただそれらは体験に根ざした「個人技」というか、ばらばらな試みでした。そして彼らが「戦争社会学」を名乗ることもなかったのです。

そのことにどういう背景があったかということ、1945年8月15日を「終戦」といつてきた戦後の日本社会があるのですね。つまり「敗戦」ではない。負けた事実をごまかすために、「終戦」といつてきたわけですけど、一方で、戦争自体をもう永久にしない、するつもりがないから「戦争、おしまい。」という意味では、「終戦」といつてよいのです。だから、負けた事実のごまかし半分でありつつ、9条（戦争放棄）を守っている限りにおいては、「終戦」という言葉は当てはまる。

そうした社会では、興味中心に「戦争」を語ることをタブーとしてきた。学問の世界の「知的好奇心」——これでもダメです。まあ、戦争を「もうしない」のであれば、戦争の研究はする必要がないということだったのか

も知れない。

そしてこの社会は終戦後、何をしてきたかということ、何よりも経済的な繁栄を追求してきた。戦争中には、国家のために死ぬこと、あるいは民族のために死ぬことが正しい、自分たちの欲求達成は後回しにするべきで、私たちの命それぞれが民族や国家のためにあるのだと教えられていた。一方、戦後の日本の社会は、そういった民族や国家のためではなくて、まずなによりも自分の幸せ、あるいは自分の家族の幸せのためだとしてきたのですね。自分の人生の価値をより個人主義的、プライベートなものの中で考えるようになった。

そうすると、とり残されてしまうのは、戦争に行ってきた自分の青春を捧げたような人たちや、あるいは友人たちを戦場に置き去りにしてしまったと感じている戦中派世代。この人たちには、自分たちはなぜあのような目に遭って、友人や家族は何のために死んだのかという思いがある。それゆえ戦争体験の意味について、より深く理解したいと願っている。もちろんこれは社会学だけではなくて、文学や思想の研究者たち、批評家といった人たちがさまざまな形でアプローチしていた、戦後日本社会のありようを考えるための大きなテーマでした。

まずは学徒兵の戦争体験がテーマとなりました。当時の大学生は社会のなかのエリートで、戦時中政府は彼らを軍隊の下級指揮官として出征させた。下級指揮官というのは育成にそれなりに手間がかかるうえに戦時になれば消耗（戦死）が激しく、数が大量に必要となります。その補充には、大学生がちょうどよかったのです。ちなみに文系のみです。それに関係してだと思のですが、彼らの戦争体験にまず関心を持ったのは、大学教員など、何らかのかたちで大学に関わりのある人でした。庶民のほうは敗戦後を生きること必死だったわけで、あの体験はなんだったのだと考える余裕はなかった。そうしたなか、東京大学の生協部が『きけわだつみのこえ』という戦没学生兵士の遺書・遺稿集を出し、それがベストセラーになった。それはもしかすると一般庶民の体験した戦争とは少しずれていたかもしれない。

先ほどふれた森岡先生が進めたのも、特攻隊の遺書の検討による死を前にした生の意味づけの探究です。特攻隊の記念館に行けば、たくさんの遺書を見ることが出来ます。通り一遍（にみえる）のもあると思います。それをもう少し深く、社会学の概念や方法を使って丁寧に読んでいこうとさ

れた。森岡さんは、自分の本を書いているときに、友人たちの魂が書齋に降りてくるのを感じたともおっしゃっていましたね。

学徒兵はエリートですので、かれらの遺書・遺稿は当然、知的なたまたまいを湛えている。目の前に理不尽な死が迫った上での知性のあり方が、人々の感動を呼んだのでしょう。ただなんといっても、それはエリートのもの。一般庶民は、美しい遺書を残すことができない。そうした溝を克服していくことが目指されました。

注目されるようになってきたのは、男女を問わない一般市民（として）の戦争体験。例えば、空襲や原爆に遭った、あるいは疎開をした、さらには沖縄のように地上戦に巻き込まれたという体験。兵士の戦場体験や軍隊体験ではなく、そういった市民の戦争体験が注目されるようになってゆく。その背景には、総力戦という、いわば「社会の戦争」があった。軍隊・兵士だけが前線で戦うのではなく、一般市民も銃後で国民として戦うという意味です。それに応じて、むしろ市民の戦争体験（戦時体験）のほうが一般兵士の戦争体験よりも重視されているようにみえます。

いずれにしても、兵士から市民まで、男性から女性まで、大人から子どもまで、多くの犠牲を経て、その苦しい時代を生き延びたがゆえに戦後の繁栄があるのだという、平和な戦後日本あるいは経済大国日本の建国神話として、「日本人の戦争体験」というものは共有されてきたということになります。

1960年代ぐらいから、「戦争体験の風化」という言い方がされるようになってきた。高度経済成長が進み、日本の社会がどんどん豊かになって、戦争で死んだ人たちのことを忘れてしまっているのではないかという問題提起です。もちろんその時代、再軍備あるいは右傾化も問題とされていますし、一方で戦争反対のことをいう左派学生たちがいた。だから「風化」のせいで戦争反対や平和主義がなくなったというわけではない。注意しなければならないのは、その意味内容が少し変化したということです。

というのも、全共闘の学生というのは戦後のベビーブーム生まれですので、戦争体験を持つ親を持っていることが多いのですね。つまり戦争から帰ってきた人々が一斉に子作りを始めた1940年代後半のベビーブームで生まれたのが「団塊の世代」。彼らも戦争反対を唱えているのですが、一方で経済成長と「明るい未来」を知っている。それに対して戦争を実際に体験した親世代が説教するわけですね。戦時中は貧しく、軍隊というのは

苦しくてつらくて云々……と。ですので、全共闘世代の人たちは、アジア太平洋戦争に従軍した兵士の体験談のみを核にした平和主義には反発します。それよりもっと考えなければいけないのは、今（1960年代）のベトナム戦争の犠牲者だ、という。自分たちに過去の戦争体験でお説教をかましながら戦後の経済的な繁栄を享受しているオヤジども、経済成長のためにアメリカと軍事同盟（従属的な安全保障条約）を結び、アジアに君臨しているのは許せない、みたいなものがあつたわけですね。そうすると、かつての兵士も軍国主義の被害者としてではなく、アジアを侵略した加害者という側面で見られるようになってゆくわけです。だから60年代、戦争体験は「風化」によってたんに忘れ去られたわけではなく、少し違う文脈のなかに置き直されたと考え方がいい。世代間のディスコミュニケーションが「風化」といわれた可能性です。

その延長で、戦争責任の問題、性暴力や虐殺も問題視されるようになってきている。それは、戦争の被害者としてしか自分たちを捉えられることができなかつた上の世代にはやはりできなかつたことでしょう。兵士や庶民として本当に酷い目に遭つた人もいるから、それはそれでしょうがないことだと私も思うのですけれども。先ほど挙げた知的エリート層の戦争体験も、結果的には、兵士＝被害者イメージを強調したのです。

時代が進んで1990年代半ば。それは先ほど言いましたように戦後50年で、もう一つは1990年前後に冷戦が終つて少し落ち着いたという感じですね。体験者が亡くなってゆくなかで「戦争の記憶」というようなことがいわれるようになりました。逆にいえば、体験当事者がいなくなることによって、その多様で自由な受け取り方（解釈）が可能になってくる時代です。やはり「解釈」というのは好き勝手なものですからね。

戦争体験がどのように継承され、断絶しているのかという問題提起、あるいは人々に共有されている「戦争の記憶」が社会のなかでどう機能していくのかという問題提起があつた。例えば8月15日、高校野球の球児が試合中に突然黙祷する。日本の人が心をつににする重要な儀式ですね。あれはだから平和主義というか、左派・右派にとつても重要な記念行為です。とてもナショナルだ。平和を祈つてナショナルな行為に身を浸す時間（選手にとっては、息を整える時間に使えると思うのですけれど）。そういう「戦争の記憶」というのは個々の感情の問題ではない。日本社会がどういふ社会なのか、どのように「戦争の記憶」を共有し、そこで何が起かつて

いるのかという問題です。これを「集合的記憶」というふうにするのですけれど、戦争体験の研究は、集合的記憶としての「戦争の記憶」研究という文脈に移っていくわけです。これが95年ぐらいからの状況ですね。

あとは戦争のイメージ研究。これも一種の「戦争の記憶」研究として挙げられます。さまざまな大衆文化の表象に戦争体験の影響がどう現れているのか。例えば『ゴジラ』という映画がありますけれど、この『ゴジラ』という映画は水爆実験で巨大化した怪獣が、日本のまちを再び炎上させるような映画なわけです。原爆怪獣・水爆怪獣といわれるのですが、これは「核」に対する私たちの意識の現われでもあるし、もう少し広くいえば、「戦争の記憶」映画です。ゴジラが都市を炎上させる。敗戦後やっと10年ぐらいが経った1954年公開の映画ですから、10年ぐらい経って戦争が終わったと思ったのだけれど、ゴジラが海から上陸してきて街を燃やしてしまうのですね。ああまたか、みたいな意識が画面から溢れています。例えばゴジラが東京を火の海にするのですけれど、一瞬音楽も止まり、セリフもなくなって、炎上する東京を広い角度で映し出す。誰かが「ちくしょう」とつぶやく。これが完全に空襲の記憶をよみがえらせる。あるいは避難するシーン。ゴジラから「避難」する人びと。これも空襲警報のもと逃げ感った人たちの記憶を呼び覚まさせる。思えば私が幼少期に再放送でみた「ウルトラマン」シリーズ（1960年代末～）でも、怪獣が暴れるシーンに「避難」がみっちり描かれていた。家財道具を背負ってリヤカーで逃げるのです。

1974年の『宇宙戦艦ヤマト』。今に繋がるアニメブームのスタートですけれど、これは太平洋戦争末期に沈んだ大和というものが、なぜか宇宙戦艦に改装されて、宇宙に飛び立って異星人と戦うというものです。改装するよりも新しく作ったほうが早いような気がするのですけれど、大和＝ヤマトが地球を救うという話です。監督は舛田利雄という人なのですけれど、この人はこの時期、『二百三高地』や『大日本帝国』とか、たくさんの東宝の戦争映画を撮っている人です。つまり『ヤマト』は、アニメブームの起爆剤という面もあるのですけれど、一方で戦争映画の系譜の中にあるんですね。戦争が終ってから30年ぐらい経って、「戦争の記憶」がだんだん薄れていくというときに、もう一度子どもたちに戦争のことを考えさせようといったときに出てきた。そしてそれは次の世代——みなさんのことです——にどう継承されていくのでしょうか。

このように、集合的記憶としての「戦争の記憶」研究は、じつに様々なアプローチが可能だと思えるのですが、これこそ社会学の面白さです。そもそも社会学は社会科学の一つですよ。政治学とか法学とか経済学とかと同じようなハードな文系学問の一つ。でありながら、一方で人間あるいは文化現象の内面的な理解、内面的な理解というものを目指している。つまり人文科学の要素を持つ社会科学ということになります。戦争体験の研究、「戦争の記憶」研究は、そうした人文学的な社会科学としての社会学の本領発揮の分野であると思います。

#### 4. 社会的対象としての「戦争」②： 「戦争が社会を作る・変える」という視点

もう一つ社会学と戦争の結びつきで重要だとされる文脈は、戦争が社会を大きく変えるという社会変動論的な問題意識です。

社会学というものは、近代化によって激変する社会をなんとか説明しようとして誕生しているのですね。社会学は、社会変動論・歴史社会学として誕生しているのです。ウェーバー自身は歴史学でもよかったというふうにいっているくらい。彼の論争相手は歴史学者でした。「社会学」はまだ明確には存在しなかったのです。（もう一人の祖といわれるフランスのデュルケームはその名を冠した「デュルケーム学派」が形成され、弟子をグループで育成していきますが、個人プレーのウェーバーにはいわゆる「直弟子」がない。これも社会学の輪郭がまだ薄かった証拠だと思います）

そしてまた現代社会学は、20世紀の半ばから後半にかけて起こった変化を説明しようとしている。これを「現代化」と呼ぶとすると、その契機として戦争はすごく重要であると考えられている。つまり戦争の準備をすることによって、大規模かつ合理的に資源を再配分しなおさなければいけないことから、そのために大きく社会を人工的・計画的に変える必要があるとされるわけです。例えば経済などは市場の自由競争だけに任せてはだめで、恐慌が起こってしまったり、資源の無駄遣いが生まれたりする。ゆえに時には政府が介入しその自由を制限する必要があると。また、自由な生存競争の結果で貧しい人が生まれても努力不足の「当然の報い」だとするのではなく、弱者として社会で生活を保護してあげなければならない。――などなど、「自由」が猛威を振るって人間の不幸を招きかねないときに、国家が「社会」救済の名のもとに人々の「自由」を制限するべく介入

してゆくということです。そういった意味で、戦争はある意味「究極の公共事業」だといえましょうが、まさに人々の「自由」を制限する政府のあり方が体现される瞬間だといえます。

戦争を契機とする「現代化」を語るのが、社会変動論の一種としての総力戦体制論という研究です。一般的な理解では、第二次世界大戦はファシズムと自由主義・民主主義の戦いで、冷戦は社会主義・共産主義と自由主義・資本主義の戦いであるとされています。つまり20世紀の大きな戦争は、全体主義と自由主義とあいだの戦いだとされる。けれども、「自由主義」とされる側においても、戦時においては、自由の制限や社会主義的な政策が少なからず行われる。

総力戦体制論が提起したのは、ファシズムか自由主義かは程度の違いであって重要ではなく、「社会」への介入において両者は似ている、ということでした。つまり20世紀の戦争は、軍隊が強いか天才的な戦略家がいるとか兵器の性能が上とかではなくて、社会の持っている力の全てをぶつけ合うような戦争だったのです。つまり「国力」が重要だ。

そうすると、戦争はむしろそれと一見矛盾するような福祉国家化を進める。厚生政策や医療保険、つまり社会保障を充実させていきます。いってみれば、一方では兵士として死ぬと国は命令するのですけれど、一方では国家は人々の「生」を「厚」くしてゆこうというのです。戦争も厚生も国が丸抱えする。日本だと、厚生省の設置が日中戦争中の1938年。これが総力戦の時代です。

第二次世界大戦という破壊の時代が終わり、冷戦の時代が安定したものになると、豊かな消費社会になります。けれども豊かな社会は、この総力戦体制論の研究者からすると、まさに戦時体制・総力戦体制の遺産だということになります。健康や失業や老後など、人生における様々な不安定要因を消して安心して働くことができるという戦後社会の経済発展のためのベースは、戦時体制下につくられた諸制度にあった、ということです。

この社会保障、これをあんまりやりすぎると結局国家に莫大な負担をかけることになる。そして団塊の世代や、さらに今後、団塊の世代の子どもである団塊ジュニアが老年に入ってくると、国家の大きな負担になるが、どうするか。永らく続いた総力戦体制とその遺産をリストラして、小さな政府を作らなければならない。これが官僚支配の打破、新自由主義改革だということですね。しかしこれは社会にとっての劇薬で、どうするべきか

というのが近年の課題です。

先ほどの戦争体験論は、個人個人の体験の意味づけ、価値といったものに関係するのですけれど、一方でこの総力戦体制論は、国家や社会全体のメカニズムを総合して理解していくという、理論的に大きな枠組みをとる。これも社会学の面白さですね。先ほどの戦争の記憶のほうが、文学的な読み取り、解釈といったものを重視した領域、こちらのほうは社会をシステムや制度の集まりとして捉えている。そして日本の「戦後」を考えたとき、両側面がどのようにからまってゆくかに注目する視点が重点なのは、いうまでもありません。

## 5. 社会学的対象としての「戦争」③：

### 日本には存在してこなかった「軍事社会学」

日本以外、海外ではどうなのか。「軍事社会学」という分野が、海外の社会学ではあります。アメリカなどでは、戦後社会学の起源のひとつにもなっています。

例えば軍隊というのは組織です。しかも非常に特殊な組織で、擬似共同体でもある。兄弟、親子のように、つまり家族のように振る舞うのですね。お父さんが隊長で、自分たちは子どもである。あるいは1年上の先輩の兵隊は兄貴で、自分が弟で。また下が加われば弟ができる。すごく親密で結束の固い共同体であります。体罰もあればいじめもある。でも軍隊の外形だけをみると、非常に合理化が進んだ官僚組織なのですね。これはウェーバーの説明なのですから、むしろ近代的な組織、近代官僚制のほうが軍隊の形を真似して作ってある。このとき官僚制というのは、なんとか省、公務員という意味だけではなくて、私たち人間が組織を作るときのモデルということです。例えば、会社があれば部があって課があって係がありますよね。組織はだいたい、こういうツリーになっている。これ軍隊と同じなのです。連隊の下に大隊がある。第1大隊第2大隊第3大隊がある。大隊の下には中隊がある。会社でいえば係長というのはその係の長であり、課長というのはその課の長。それは軍隊も同じ。中隊長がいて大隊長がいて連隊長がいる。何人もいる中隊長のうちに、一番有能な人が、あるいは年功序列で上にあがる。中隊長が大隊長にあがる。そうすると、有能な人を上に昇格させて使える。何が良いつて、組織は一定の連続性を持っており、メンバーをごそっと入れ替える必要がない。これは会社でもそ

う。会社も係長何人かのうちの一番能力のある人を課長にあげる。課長何人かのうちの1人を部長に上げる。これが年齢の順番に行われると年功序列ですが、軍隊の場合は戦闘で何人か死にますので、生き残った人の中で一番有能な人を上にあげていく。ピラミッド型の組織で上のほうのポストは少ないけれども、戦死と能力による選抜で事足りる。会社の場合は、成長によるポスト増ということがあって、年功序列だけで比較的うまく回っていた。この方式、組織の新陳代謝が無理なくできるところがよいところ です。

もう一ついえば、部分の独立性と全体の一体性のバランスが非常にいい。部の下にいくつか課がぶら下がって、課の下に係がいくつかぶら下がる。そうすると部を一つ取り出せば、一つの部の下に手足となる課がいくつかあるので、これだけで「部」隊として動ける。階層のどの部分を取り出しても、その下に組織が相似したかたちで連なっているので、部分部分がそれぞれ、あるスケールの「全体」として作動することができる。そういう近代組織・官僚制というものの原型を用意したのが軍隊だといえる。

一方で、親密な共同性としての軍隊については、リーダーシップや同士の紐帯や集団心理、モラルの維持など社会心理学にも繋がるような小集団研究を試みるのが可能です。第二次世界大戦後のアメリカでも、ストウファーというひとが帰還した兵隊に大規模な社会調査を試みた。これが人間関係論や社会調査方法論をどれだけ発展させたことか。

あと重要な軍事社会学の分野としては、政軍関係があります。市民社会・政府と軍隊・軍部の関係、シビリアン・コントロールの問題。これは政治学が得意としていますけれど、社会学に比べると、政治学はどうしても市民社会を理念的に捉えてしまう。社会学は政治学とはまた違う分析ができるだろうと。そしてこうした研究は国際比較に対して開いている。国際的な共同研究です。それに対して日本の社会学に軍事社会学といういい方は、あまりないです。

ところで、軍の士官教育において社会学が重要な科目になっているのですね。社会調査や社会心理学、小集団研究、人間関係論、組織社会学や教育社会学、あとは政軍関係（政治社会学）。テーマは沢山あるのですが、これらはつまり社会学の「軍事利用」です。これはちょっと考えてもいいかもしれないテーマですよ。

軍事社会学というのは、市民が軍事について深く考える物差しを用意し

てくれるはずです。軍隊が当たり前であって、その存在がある程度社会的に認知されている国や社会では、軍事社会学が軍隊をみる上で必要な視点です。つまり、市民社会が軍部・軍隊を監視したりコントロールしたりするための重要な知識だというわけです。いってみれば、そうした社会では軍事領域が公共性を持っているのです。税金を投入しているのだから、市民は関心を持ちシビリアン・コントロールしなければいけない、という考えです。日本でもこれまでのようにタブーとするだけではなく、これから必要とされる領域でしょう。少なくとも防衛省・自衛隊に対する社会学的研究は、市民社会にとってすごく重要な問題になってくるだろうということです。そして彼らだって社会から「浮く」ことが怖いと思うのです。軍隊だけの常識があると、また戦前のような軍部の暴走が始まってしまう。それは怖いはずですよ。だからこそ士官候補生に市民教育としての社会学を教えているという側面もあるのでしょう。

## 6. 「戦争社会学」は何を考えるべきか？①：

### 近代日本の「戦争体験・戦争の記憶」の特殊性・普遍性

その上で「戦争社会学」は何を考えるべきか、ということなのですが、軍事社会学の国際共同研究に入れてもらって、というだけではないような気がします。まず日本社会における戦争や軍事の特殊性・独自性を、あるいは自衛隊の扱いづらさみたいなことを考えないといけないのではないかなと思うのです。ただ、それにしても欠けてきたのは比較の視点なので、勉強しなければならないことはたくさんあるのですが、これは自分の反省でもあります。

一方で、日本にはやはりとても特殊な軍隊や戦争と社会の関係が歴史的にある。まず日本近代史というのは、急激な「上からの近代化」で描かれる。急いでやった分、設計主義的なところ、計画主義的なところがあるのです。ヨーロッパで近代化というのは自由な人間が試行錯誤を繰り返しながらされてきたもの、つまり長い時間をかけてきたということがありましたので、それに比べるとその成果物だけをとった官僚主導の計画主義でやってきたところがある。その結果、権威主義が残る社会であり、不当な戦争を押しとどめる民主主義の成長も抑制された。ただそのぶん、スピード感だけはすごく、非ヨーロッパ文化圏では初めての列強と呼ばれる富国強兵を達成した。このあたりをどう考えるか。そして無理な戦争を始

め、滅亡寸前に至った敗戦。そして戦後は一転して絶対平和主義。この平和主義のもと、軍事に使っていたパワーを何に使ったかという経済成長と消費社会。少し前まで世界2位の経済大国。ただじゃあ、そうした経済成長は何のために進められたことなの？といったとき、うまい答えを持っていないまま、経済的な凋落が始まりつつある、という……。

この急激な軍事大国からの平和転換。これ特殊だと思います。一方で、様々な文化的表象、例えば先の『ヤマト』を始めとする子ども向けのアニメなどで、戦争がある意味「無邪気に」描かれてきた。学問を始め、パブリックなところで軍事的なことを語ることが禁じられながら、大衆文化では「戦争」が真っ盛り。やはりどう考えても矛盾がある。

最近の流れでは、ミリオタでありながら萌えオタでもあるというありえない組み合わせをやってしまっている。軍艦と美少女。ちょっと頭がおかしくなりそうな組み合わせだと思うのですが、それを楽しんでしまっている。そういうことで考えると、日本の文化が軍事とどう付き合ってきたのか。これはかなり面白いテーマだと思う。ヨーロッパ人に聞かせたら、すごく興味深く思うのではないのでしょうか。

まとめると、日本の特殊性というところな感じです。「富国強兵を短期間で達成して、近隣諸国と戦争を起こす。非常に迷惑をかける。一方で戦後派平和主義を貫いて、経済復興を恐ろしい勢いで成し遂げる。軍事的な潜在力はどう考えてもあって、警戒を要するけれども、ポピュラーカルチャーの中では暴力や殺人のトーンを弱めて「萌え」として軍事を扱っている」と。……やっぱり意味がわからない。例えば自衛隊広報が何を考えているか。ちょっと気にはなります。萌えオタみたいな人を取り込みつつ、彼らをどのように軍人として育成してゆこうというのか。どういう戦略があるのでしょ。知りたいです。

## 7. 「戦争社会学」は何を考えるべきか？②：

### 「現代の戦争」との関わりをどう考えるか？

あともう一つは、「現代の戦争」です。私たちの戦争観あるいは平和主義は、まだまだ20世紀の総力戦の時代を想定してはいませんか。でも総力戦なんてもうできません。世界の経済がこれだけ絡まりあっては、国家間で本気の戦争はもう起こせない。企業も国際化しているし、人間も流動しています。国を単位にして多様な利害を敵と味方にすっきり整

理・分離することなんてもう無理でしょう。またそもそも、これだけ一人っ子が多い世の中で、国家同士の全面戦争はなどまず遂行不可能でしょう。だから徴兵制だって現代では軍事的合理性が全くなく、実現を目指してもほとんど意味はありません。その復活をいう人は、軍隊に「若者の鍛え直し」を期待している人です。受け入れる側にとってはいい迷惑でしょうね。

大規模な大衆軍隊が総力戦の時代には必要でありました。徴兵制が必要だったわけです。けれど今あるのは少人数のプロフェッショナル軍隊、例えば非常に練度が高い特殊部隊なんかが重宝されます。これがヘリコプターかなんかで降りて行って、敵の指導者を暗殺するか逮捕（向こうからみれば誘拐）して帰ってくる。もちろんデモンストレーションとして、敵国軍隊を派手に壊滅させる作戦もあるとは思いますが、それはテレビの向こうの観衆へのアピールです。「戦争」といってもだいぶ違うものですね。逮捕や裁判、治安維持なんていうと、警察の仕事みたいです。一般市民と自爆テロ犯を瞬時に区別しなければならない。そうした戦争の新しい状態に答えようとして、軍事社会学はいろいろなテーマを与えられて研究を進めているようです。「ポストモダン」というと日本では消費社会の中で生まれた言葉だと言われていますけれども、軍事社会学でいうポストモダンは、モダンが前提としている戦争や軍事が乗り越えられていくなかで、各国の軍隊がどのような対応をしているのかという問題意識です。

日本の自衛隊はどうなってゆくのでしょうか。20世紀型の正規軍相手の戦争というよりは、民兵・武装勢力を相手にした低強度紛争とか非対称戦争といったものにも対処しなければいけないという状態になってゆくのでしょうか。あるいはそういうふうに変わっていく可能性を含んだ自衛隊に、私たちの市民社会がどのように関わっていくべきなのかということも研究しなければいけないということですね。

今の自衛隊にはさすがに無理でしょうか。ただもし9条が改正されることになったら、その後には、そうした議論が出てくるはずですよ。

## 8. 「戦争社会学」は何を考えるべきか？③：

### 戦争の社会理論の必要性

最後に挙げたいのは、戦争の社会理論です。暴力の問題を焦点としつつ、「社会とは何か」という問いに関わる、非常に抽象度の高い問いです。

戦争というのは、いってみれば国家の名のもとに行われる集団同士の喧嘩です。「武力による利害衝突の解決」などと格好よくいいますけれど、要するに国家・国民の喧嘩です。逆にいえば、その喧嘩、何故国家同士を単位として行わなければいけないのでしょうか。ある国の人々全員を「一掃くたにして懲らしめたい」と思ったり、憎んだり殺したいと思ったりすることが、何故可能なのでしょうか？ 本来ならそれらは非常に個人的な感情なはずです。

もう一ついえば、そもそも、私たちは自分の利害を解決することに自分の武力や暴力を使ってはいけないわけです。例えば皆さんの持っているペンを私が貸してくれと行って、皆さんがいやだと言ひ、私がジャイアンのように威圧して取り上げる——と、これ強盗になりますよね。許されない。この社会、法律で暴力はふるってはいけないとされている。個人の利害衝突を暴力で解決してはいけないというルールがあるのです。暴力の集団的な行使によって利害関係を解決するのは暴力団だとされるわけです。けれど、逆にいうと私たちはなんで欲しいものを欲しいと行って、相手を殴って奪ってはいけないのかということですね。

私たちは暴力の行使の自由を放棄し、国家に預けているのですね。私たちは基本、暴力をふるいません、そういう約束（契約）を「社会」、より具体的には国家としているのです。その分、警察がその「実力」で治安を守ってくれるわけです。警察には私たちの税金が使われています。それで私たちは安心して暮らすことができる。これが私たちの社会です。私たちの社会秩序の源泉は、各人の暴力の放棄と国家によるその代行（治安維持）ということになります。

ただ、社会・国家をひとまとまりとしてみて、海外との関係でいえば、巨大な暴力装置である軍隊は、国家に所属している。戦争は国家に帰属する。逆に言えば、個人は外国に対して戦争を始めることができないわけです。当たり前ですか？ 何故でしょう？ そういうこと、社会学の思考トレーニングとして考えてみてもいいと思いますよ。いずれにせよ、暴力（の行使の自由）は全部国家に預けているのです。逆にいうと、つまりそれは何故？、何故国家？ということですね。

先に進むと、私たちはいわば国家（あるいは社会）といつのまにか「契約」しているが、我々のまとまりとしての国家は暴力行使の自由を放棄していない。国際法上の手続きをきちんと踏めば、国同士の喧嘩である戦争

はまだ許されている。「宣戦布告」というやつです。1941年のアメリカ国民が日本海軍の真珠湾の奇襲攻撃に激怒したのは、戦争を仕掛けてきたからではないですよ。そうではなくて、「宣戦布告」という手続きを踏まなかったからです。逆にいえば、戦争すること自体は独立国家の権利として認められている。

ただし現在、戦争によって国家間の利害衝突を解決することも不法にされている。戦争自体がもう既に違法なわけです。その嚆矢として、敗戦直後の東京裁判でも「平和に対する罪」が問われました。「世界」が一つの社会としてみなされる集団生活のようなものになっていて、戦争は国家の私的な暴力行為とみなされるようになっていて、不法な戦争に対する国連軍や多国籍軍の出動は、むしろ世界警察の治安維持のようなものになっています。だからそうした軍隊は、指導者を逮捕して裁判にかけようを目的にするようになっていて。

戦争と軍隊、世界と国家の関係が変わっていくなかで、具体的に何が起きているかを探究することが課題となります。そしてそれは、私たちがそもそもなぜ群れ集って社会を形成しているのか、そしてその「群れ」がなぜ国家を単位としているのかを考えることにも繋がっていくでしょう。

近代であれば、その鍵は徴兵制だったのです。民主主義という制度が生まれる。同時に、徴兵制も生まれる。命をかけて共同体を守る覚悟がある人は、国の政策を決める投票の権利を持つということです。そうした戦争の可能性ということがあったからこそ、徴兵制と民主主義が連動していくのですけれど、それがだんだんなくなっていく。では私たちの社会や国家の正統性はどういう状態になっているのか、といった根本的な問題も、戦争社会学の課題として考えてもよい。

このように、戦争社会学は、そういった意味で非常に根本的な問題にも取り組んでいるし、現代の戦争、現代の軍事組織を具体的に調査することもする。非常にやらなければいけないたくさんの方があつ、現実があまりに急ピッチで動いてしまっている状況のなかで、手探りで進んでいる領域です。けれど、やれることがあるうちはやっていくしかない。仲間と共同で、能力が追いつく限り頑張っていこうとは思っています。テーマもたくさんあるので、仲間はさらに多い方がいい。入ってきてほしいという気持ちもあります。もちろん卒論でも良いと思います。参加してくれると嬉しいと思います。以上です。ありがとうございました。

### 参考文献

- 野上 元, 2006 『戦争体験の社会学』 弘文堂
- , 2011 「テーマ別研究動向（戦争・記憶・メディア）」『社会学評論』  
62巻2号
- , 2011 「戦争体験の社会史」藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』 弘文堂
- 野上 元・福間良明編, 2012 『戦争社会学ブックガイド』 創元社
- 福間良明・野上元・蘭信三・石原俊編, 2013 『戦争社会学の構想』 勉誠出版